

平成 22 年度水源地域活性化調査委託業務

（事業名：ゆうばり名画座プロジェクト事業）

特定非営利活動法人ゆうばりファンタ

1. 企画趣意

夕張市は、かつて、良質で豊富な石炭の供給基地として石炭産業を基幹に飛躍的に発展しましたが、昭和 30 年代後半以降の国のエネルギー政策転換により炭鉱の閉山が相次ぎ、平成 2 年には炭都夕張から石炭産業が完全に消滅しました。

また、炭鉱で栄えた夕張は、炭鉱が 24 時間採炭の不規則な 3 交代制の勤務のため、炭鉱マンの最大の娯楽は映画であり、市内には多くの映画館が立ち並び、さながら「映画の都」でもありましたが、炭鉱の撤退とともに映画館も消滅しました。

炭鉱産業の撤退は、人口の急激な減少とともに、地域経済や市民生活、さらには市の行財政運営まで重大な影響を与えました。

市は、雇用や過疎対策として、「石炭から観光へ」とテーマパークやスキー場の開設など観光産業の振興で地域経済の再生を目指しました。

その一環として、かつての炭鉱のまちの賑わいを彷彿とさせる映画祭を最後の炭鉱が閉山した年から開催しています。この「ゆうばり国際ファンタスティック映画祭」は、市が財政破綻し一時休止になったものを市民による NPO 法人を立ち上げ映画祭を引き継ぎ、これまで 20 回を数え、国内外から多くの映画監督や俳優などの映画人や観客が集う一大文化イベントとして全世界に「映画のある街・夕張」を発信しています。

また、夕張では日本を代表する名画が数多く残されています。炭鉱住宅街を舞台に繰り広げられた人間ドラマ「幸福の黄色いハンカチ」や明治初期の北海道開拓を壮大なストーリーで描いた「北の零年」などの撮影が行われ、そのロケ地やロケ地セットが市内で保存、公開され夕張観光の拠点として多くの観光客が訪れています。「北の零年」のロケは、シューパロダム建設で水没する鹿島地区で行われ、かつて炭鉱で賑わった鹿島地区の風景を残すものになっています。

夕張市は、平成 19 年 3 月に財政再建団体に指定され、財政再建の途上にあります。

炭鉱で栄えた当時、10 万人を超える人口も、今では 1 万 1 千人になり、高齢化率も 40% を超え、疲弊するまちになっています。新たなまちの活性化を進める必要があります。

暗いイメージのある閉山・財政破綻を隠してしまうのではなく、新たな街の活性化のために、数多くある夕張が残して来た北海道・日本の遺産・資源をPRし、市民の活動とともに地域活性化に寄与するものと考えます。

2 業務全体の方針及び手法、業務の対象地域

国内外から多くの映画人や観客が集う「ゆうばり国際ファンタスティック映画祭」の開催時期に合わせ、市内の各集落において高齢者を対象とした往時の夕張の賑わいを偲ぶ移動上映会（最盛期映画館が20館あり、炭鉱人の最高娯楽）を開催するとともに、映画を軸としたフィルムコミッションやロケ地観光など夕張・北海道の観光、地域振興のあり方について語り合う。

- ①名画座キャラバン
- ②夕張市の記録映像の収集及び編集
- ③地域の活性化を目的とした上映会
- ④夕張の観光と地域の活性化についてのトークセッション

3 業務全体の手順、スケジュール及び積算

7月～10月 過去に撮影された北海道・夕張の映画の情報収集。
夕張でのダムの記録映像収集及び編集。

11月～1月 上映プログラムの策定と移動映画館の実施。

1月 ゆうばり国際ファンタスティック映画祭記者会見に
合わせて概要及びプログラム発表。

2月 ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2011の開催に
合わせて、委託業務の実施及び調査。

4 実施報告

① 名画座キャラバン

炭鉱人の最高の娯楽であった映画を、なかなか都市部のシネコンに行けない方に対し、名作映画上映と過去の夕張の映像を合わせ上映する。

日時会場

1 月 20 日 13 時 南部コミュニティセンター

1 月 21 日 13 時 滝の上生活館

1 月 23 日 13 時 アディーレ会館ゆうばり大ホール

上映内容 大夕張ダム記録映像と

釣りばか日誌 20 ファイナルの上映

トイ・ストーリー3（アディーレ会館のみ）

作品選定方法 事前に町内会（滝の上、南部）の方々に聞き取りアンケートを実施し、釣りバカ日誌もしくは男はつらいよシリーズの要望が多く、北海道ロケでもある釣りバカ日誌ファイナルに決定させていただきました。また子ども達に人気のあるトイ・ストーリーの新作3を家族で楽しんでもいただくものとし決定した。

■釣りバカ日誌 20 ファイナル

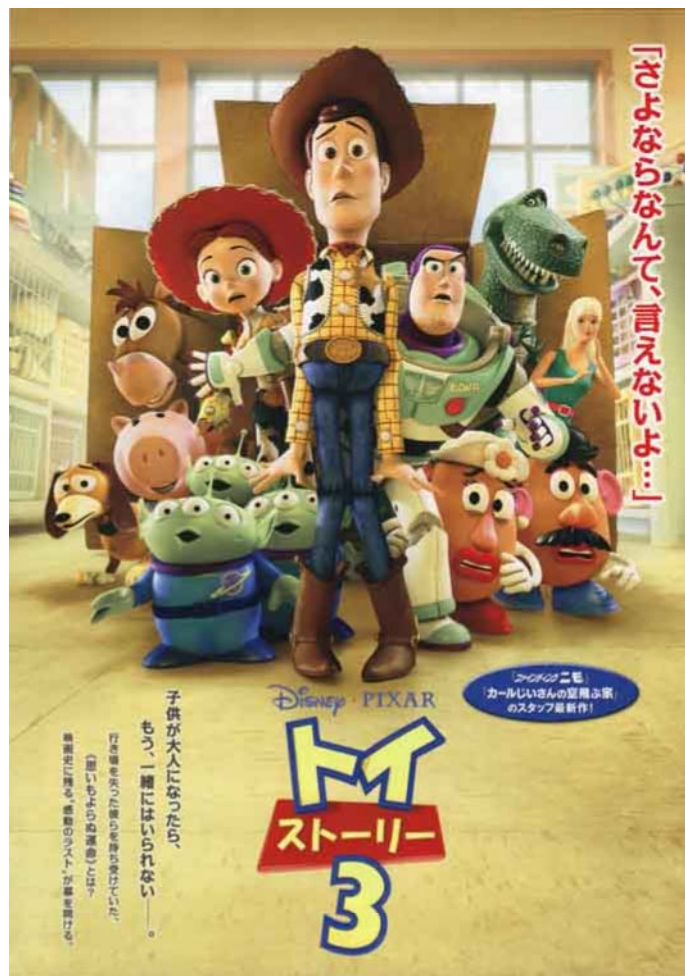


製作・配給：松竹 2009年 日本 117分

●ストーリー

近年年の業績悪化により、追い詰められる鈴木建設。会長の一之助（三國連太郎）が無期限の給料全額返還を実行する中、一之助のために一肌脱ごうと奮起した伝助（西田敏行）は、得意の釣り人脈から思いがけない大型受注に成功する。そのかいあって会長賞とご褒美の釣り休暇をもらった伝助は、一之助とともに北海道へ釣り旅行に出掛ける。人気シリーズの第20作目にして最終章作品であるこの作品は北海道の中標津町、厚岸町などで撮影が行われた。

■ トイ・ストーリー 3



配給：ブエナビスタ・インターナショナル(ジャパン)

2010 年/アメリカ/カラー/110 分/

アンディがおもちゃで遊んでいたのも今は昔。アンディは大学に入学する年齢になり、カウボーイ人形のウッディたちおもちゃは託児施設に寄付されることになった。しかし、そこに待っていたのは乱暴な子どもたち。ウッディは脱出に成功するものの、アンディの元へ行くか、仲間たちを助けに戻るかの究極の選択を迫られる。

今年のアカデミー賞で長編アニメーション賞を受賞した昨年度ナンバーワンアニメ。

I 南部コミュニティセンター1月20日 13時

連日の降雪の中 40名集めるのも大変だったと思います。こじんまりとまとまり笑い声が聞こえる和やかな上映会と成りました。

上映内容 大夕張ダム記録映像と

釣りばか日誌 20 ファイナルの上映

参加人数 40名



上映会場



町内会会長飯塚氏と澤田直矢



会場の風景



大夕張ダムの映像



釣りバカ日誌の上映

アンケート結果

40名中回収20名

- | | |
|----------------|---|
| 年代 | 50代（4）・60代（5）・70代（7）・80代（4） |
| 来場のきっかけは？ | 映画に興味があった（8）・
興味もあり、誘われた（7）・誘われた（5） |
| 今日の映画は？ | 良かった、楽しかった（20） |
| これからの地域上映会を | 希望する（20） |
| 上映会が開かれたら | 参加する（20） |
| これからどんな映画が観たい？ | ・ 明るく楽しい映画・寅さん・
・ NPO 法人ゆうばりファンタの持ってくる作品は
ほとんど良い
・ これからもみんなが集まれる機会を作ってほしい。 |

この地域の特徴として、昔の炭鉱地域であり、現在夕張ダムを建設中の隣街である。この上映会の週は降雪が多く、除雪作業が大変の中の参加となったがたくさんの皆様に集まっていただくことができた。参加者はやはりお年寄り多く、一人暮らしの方が多かった。声としては、このようなみんなが集まれる機会を多くつくればという声が多かった。課題としてはこのようなお年寄りの多い地域に みんなで集まれる機会をどうやって作っていくか？映画はみんなで集まり、共通の話題について語り合い、笑ったり、泣いたりする良い場であると感じました。

Ⅱ 滝の上生活館 1月21日 13時

本日も、笑いあり、涙ありの、こじんまり、ほのぼの上映会でした。車の無い高齢者は、小林会長が送迎をしていました。どの地区も足の確保が大変です。 参加人数 40 名



受付の様子



小林町内会長挨拶



上映会の様子



上映会の様子

アンケート結果

40名中回収22名

年 代	30代 (2)・40代 (4)・50代 (6)・60代 (4)・ 70代 (3)・80以上 (3)
来場のきっかけ	興味 (7)・誘われた (11)・なんとなく (1)
今日の映画は？	良かった、楽しかった (20)・普通 (1)
地域上映会は？	希望する (20)・
上映会開催の時は？	参加する (20)・考えてみる (1)
どんな作品をみたいか	子ども向け ファミリー向け 娯楽映画 笑ってみられるもの 子ども達が」よろこぶようなもの

この地域の特徴として、ほとんどの方がメロン農家という地域である。この時期メロン栽培が一段落し、2月にはメロンの栽培が始まるというじきである。この地域は家族と地域の一体感が強く、何をするにもままとまりの強い地域であり、この関係か家族連れ（3世帯）で来ていただける方が多かった。3世代で楽しめるものを定期的にやりたいと言う声が多く聞かれました。

Ⅲ アディーレ会館ゆうばり大ホール 1月23日 13時

大人も子どもも楽しい笑顔がたくさんある上映会でした。子ども達の笑顔が印象に残る上映会でした。

上映内容 大夕張ダム記録映像と
トイ・ストーリー3

参加人数 230 名





受付の様子



会場内の様子



映画上映のはじまり

アンケート結果

230名中回収73名

年 代	10代以下 (21) 20代 (2) 30代 (20) ・ 40代 (9) ・ 50代 (3) ・ 60代 (10) ・ 70代 (7) ・ 80以上 (1)
来場のきっかけ	興味 (48) ・ 誘われた (15) ・ なんとなく (8)
今日の映画は？	良かった、楽しかった (71) ・ 普通 (1)
地域上映会は？	希望する (73) ・
上映会開催の時は？	参加する (60) ・ 考えてみる (13)
どんな作品をみたいか	ホラー・恋愛系・おもしろい・ディズニー・ジブリ・感動系・ 3Dワンピース・アバター・君に届け・プリキュア・ 塔の上のラプンツェル・アニメ・宇宙物・冒険物・ 温かい映画・洋画・SF大作・ディズニー子供と一緒に楽しめる・ 塩狩峠・ドラえもん・クレヨンしんちゃん・ミステリー時代 物・楽しい作品・動物感動物・心がホァンとする物・ ヤマト

この地域の特徴として、昔の夕張の中心地域であり、観光施設、市役所等がある地域である。今回 580 席ある一番大きなホールをもつアディーレ会館ゆうばりで行い、この会館も市破綻後、夕張市民で運営している会館である。映画内容もあったと思うが、3 世代で来ていただけたと思います。なかなか夕張にいない 30 代以下の来場者も多く、子ども達の素敵な笑顔が印象的でした。映画は誰にでも勇気を与えてくれるものと感じ、この財政破綻で何かと暗い話題の多い夕張の中で夕張の未来を明るくする出来事であった。

② 夕張市の記録映像の収集及び編集

2月25日（金）15：00～17：40 上映会

「放送番組に映し出された夕張を見る」

ホテルマウントレースイ・パイン 参加人数 50 名

夕張の昔の映像を掘り起こして、上映する。

I ドキュメンタリー 友子儀式 ～北海道夕張市真谷地炭鉱楓坑～

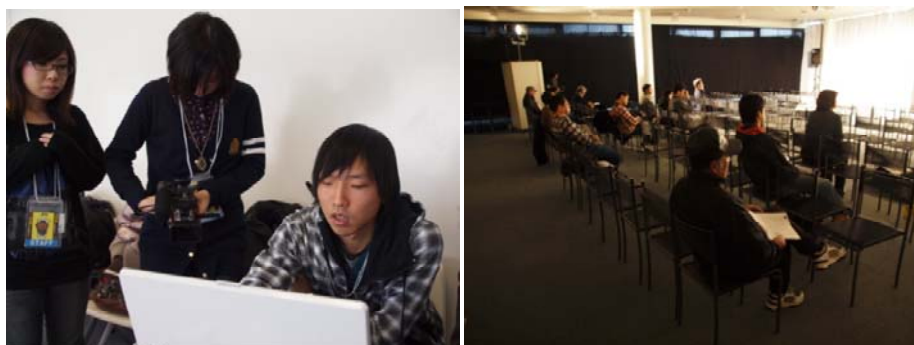
北海道夕張市の真谷地炭鉱は事故が少なく、質の良い炭鉱として知られてきた。ここには江戸時代初期に始まった、炭鉱夫同士が親分・子分の義理を結ぶ「友子制度」が全国で唯一残っていた。「1人前の鉱夫」を意味する「友子」になると、親分と子分は強い絆で結ばれて、石炭掘りの技術の伝承から結婚の世話まで行っていたという。番組では400年も続いてきた古いしきたり「友子儀式」を再現し、そのナゾを探る

II 地の底への精霊歌 炭鉱に民話の生まれる時

多くの名作ドラマやドキュメンタリーの演出で知られる今野勉が、炭坑夫だった父から聞いた不思議な伝承の生まれた背景を探る、自伝的ドキュメンタリー。死んだはずの坑夫が命を落としそうになった坑夫を助けに現れたという物語や、ガス爆発で火傷を追った坑夫の家を見舞い客に化けた狐が訪れ、かさぶたを食べさせて殺してしまったという物語など、炭坑には生死にまつわる不思議な話が多く語り継がれてきた。知人やかつての同級生を訪ね、多くの証言と資料あつめてたどりついたのは、1968年の夕張市平和鉱事故の悲しいエピソードだった。かつての日本を支えた人々の死を語り継ぐ鎮魂歌

III 夕張は、いま・・・～消え続けるまち、生き続けるもの～

2010年夏、過去の映像資料に基づき、新たに夕張の「いま」の姿を記録するワークショップに参加しました。その様子と、さらにその秋に追加撮影をした映像を構成し、2010年の夕張を記録する作品をつくりました。



夕張で石炭が発見されてから 120 年。この年から石炭の街「炭都夕張」としての歴史を深く刻みながら、地域はその石炭を基幹とした産業変動によって大きく変容を強いられています。この間、1990 年には 1890 年から 100 年にも及んだ石炭の生産も、三菱南大夕張炭鉱の閉山によってピリオドが打たれました。奇しくも今に続く「ゆうばり国際映画祭」はこの年から始まったものです。2007 年、市は炭鉱の閉山処理などで生じた 353 億円もの多額の負債を抱え、その後 19 年間にも及ぶ財政再建団体としての選択を行いました。今年、この再建団体として 4 年目を迎える他に、新しい法制の下で「財政再生団体」への移行も予定され、計画期間、赤字解消額等の課題を抱えつつも、地域と財政再生に向けた新たな計画の策定が急がれています。

夕張の歴史の一部として今に残る映像記録は、9.5mm、16mm、8mm、35mm、VHS（ビデオ）、DVD と様々な媒体によって残されています。古くは 1916 年からのものが記録され、戦後の地域の最盛期を経て、炭鉱の閉山による地域の変化と現状の記録を比較的豊かに網羅しています。石炭産業や産炭地に残される資料としては、最も情報量の集約されたものではあるのですが、ただ、全体を通じて量的・質的な蓄積とはなっておらず、また、制作意図や目的など不明なものも多く、今後の映像の調査・分析の方向の中で、近隣の地域、同一産業映像との比較・情報補填なども必要とされるところです。最大の課題は、地域で活用すべき内容を持つ映像が権利関係の桎梏により、自由な私たちでの地域還元（活用）ができないところにあります。著作権や版権、肖像権などが制作者側に帰属するのであれば、撮影地など対象となった地域に帰属すべき権利もあって然るべきと考えるところです。

夕張市は地域が形作られてから、今年で 120 年を迎えています。地名の夕張はアイヌ語の「ユー・パロ」という呼び名から転じたものですが、石炭資源の開発という目的が人を集積し、新たな地域集落として成立したものです。近現代の地域の形成として北海道という地域の現在の姿を知る上で、夕張は一つの典型でもあったところでした。この 120 年というのは、単に明治 23 年に最初の炭鉱がつくられてからの経過ですが、今年、夕張が新しい再生の道を歩むことの象徴的な区切りではあるようにも思えます。その夕張には「夕張、食うばり、坂ばかり、どんと一発死ぬばかり」とい

う戯れ歌が伝えられています。これは、夕張という石炭産業の下に変遷した地域性と、その環境で生きることの人間性が訴える、諦念にも近い感情表現となっています。ただ、裏返せば、この環境下にも動じず支えあう、炭鉱地域独特の濃密なコミュニティーを土壌と、それに育まれたおおらかな住民気質が醸成された社会が、ここにあったことの証でもあります。夕張が今まで辿った歴史は、何かこの歌に近いものがあるようにも感じられるところです。

戦前に「炭鉱集落」という図書が出版されています。国内の炭鉱地域の発生から、その特徴、変遷、民俗史までをまとめたものですが、この本には「炭鉱集落に於いては、その一生を支配するものは、実に採炭事業の盛衰である。しかもその誕生から老衰に至り、或は死に瀕する経路は比較的短時間に見られる」と序文が添えられています。旧産炭地域では「地域を残す・守る」という言葉の前に、この地域の盛衰の必然が大きな壁となり、それを乗り越えようとする努力には当然大きな負荷を覚悟しなければなりません。夕張は一面、その必然に立ち向かおうとして、それに抗し切れなかった街と言えるのではないのでしょうか。意図的に地域を支え、維持しようとするものの困難さを強く感じるところです。地方の分権化の動きの中で、地方の在り方が模索されている今、夕張という地域の現況と方向は、今後の日本の社会を見据えて行く意味でも、重要なモデルの役割を担うものだと考えるところです。夕張には地域の自然に育まれた「夕張メロン」という優れた特産物があります。また、この「夕張国際映画祭」は、夕張の娯楽文化と歴史性を併せ持つ、市民主体の事業としても定着しています。夕張が舞台となった映画「幸福の黄色いハンカチ」に描かれる人の優しさは、夕張の歴史性が培った地域文化そのものであると感じるところです。地域の再生という言葉は単に経済や人口を対置する意味ではないように思います。「大きな産業がなくても豊かで、人口が少なくても幸せで、高齢化が進んでも生き生きとした」、市民一人一人が自信を持って生きることのできる環境が前提であり、郷土の歴史と文化への誇りを根底に据えることの、地域アイデンティティーに外なりません。今から 120 年前に炭鉱を開いた先人たちがどのような道を辿り、これから私たちがどのような道を歩むのか、それを語るためにも映像を含めた地域の歴史資料の蓄積は不可欠なものであり、本質的な地域再生の土壌となるもの信じているところです。

③地域の活性化を目的とした上映会

2月28日（月）10：00～ 『信さんー炭鉱町のセレナーデー』

（108分） 参加人数 40 名



ストーリー

昭和38年、美智代は故郷である福岡の炭坑町に小学生の息子・守とともに帰ってきた。炭坑によって支えられ、男も女も子供たちも貧しくとも明るく肩を寄せ合って暮らす町。ある日、悪ガキたちに囲まれた守の前に一人の少年が現れ、あざやかに相手を打ち負かし守を救ってくれる。町では知らぬものはいない札付きの少年・信さん。親を早くに亡くし、親戚にひき

とられていた信さんは、いつも疎まれ厄介者のような扱いを受けていた。誰も自分のことなどわかってくれない、そう思ってきた信さんにとって、息子を守ってくれたこの事件を期にやさしく接してくれる美智代は特別な存在になる。それは母親への愛のようであり、淡い恋心のようであり……。けれど、信さんにもこの炭坑町にも、受け止め乗り越えなければいけない厳しい現実がすぐそばまで忍び寄っていた。





アンケート結果

40名中回収10名

年 代

40代 (2) ・ 50代 (5) ・ 60代 (2) ・ 70代 (1)

来場のきっかけ

興味 (48) ・ 誘われた (15) ・ なんとなく (8)

今日の映画は？

良かった、楽しかった (10)

作品の感想

良い作品を見せていただいた 感謝。

いろんなことを考えさせる映画であった。

まさに私の歴史の様で懐かしくもあり、悲しい様でもあり。

いろいろ思います事が多かった。

今回の上映会については、市内で撮られた映画や夕張に関するものを対象にセレクトしましたが、福岡の炭坑町での映画に決定いたしました。見終わったあとの反応としては、これは夕張でみるべき映画です。という意見も多く、市民の方々には、昔を思い出しましたなどの意見が多く聞かれました。昔の夕張を思い出した方が多かったようです。今回 ゆうばり国際ファンタスティック映画祭の中での上映となり、小さな会場での上映となりましたが、これはもう一度大きな会場でみたいという意見が多く聞かれました。

③ 夕張の観光と地域の活性化についてのトークセッション

2月27日（日）10：00～ 『過去の夕張と現在の夕張』

アディーレ会館ゆうばり・シネサロン 参加人数 38名

26日に『ふるさとを歩く 白い夕張』（1979年 8mmMF、渡辺俊博作）を観賞した後、石炭の歴史村、本町、鹿の谷、清水沢の「いま」を歩き、映像に残し、27日には、今回撮影した映像を上映し、過去の夕張と現状の夕張これから夕張がどうしなければならないかのトークセッションを行った。



今回の企画を担当していただいた東海大学 水島久光氏 ゆうばりアーカイブによせて

1. 「夕張の映像」の価値

ここにきて全国で、「地域映像アーカイブス」に関する取り組みが盛んになっている。家庭や資料庫の中に眠っていた写真や動画フィルムを発掘し、地域の人々の手によってデジタル保存を図ろうというムーブメントである。

デジタル技術の進化がある。様々な表現がデジタル・データ化され、誰でも簡単に保存・複製ができるようになった。それに併せて、アナログ・メディア上に記録された過去の表現物も一つのデータベースに取り込んでしまおうという、やや乱暴な「インターネット文化」が広がりつつある。しかしそれとともに重要なのは、深刻な社会の閉塞状況である。経済的にも政治的にも、未来が描きにくい時代であることは確かだ。時間感覚を「いま」に切り詰め、裁断し、刹那的に生きることを強えられるだけでなく、我々の生活空間も閉じていく傾向が強くなっている。ひきこもりやニートの問題だけではない。社会的なことやら身近な他者にさえ無関心な人々が町にあふれかえるようになっている。

こうした状況は、20世紀を動かしてきた「マス」社会のメカニズムの「破綻」として、様々な問題を噴出させている。2008年下半期に勃発した未曾有の経済危機や、今年の政権交代劇もその表れだ。現在、「地域」が注目される理由もひとえにそこにある。中央から周縁へ、モノや情報を大量に流すことによって維持される社会システムは、かつては戦後民主主義的平等ムードをわれわれに与えてはくれたが、逆にその情報／物流の源たる中央に対する距離感を失わせてしまった。その土地々々に生活する人々にとって、そこは根を生やす (locate すべき) 「地域 (local)」ではなく、中央に相對しつつ帰属する単なる「地方 (country side)」「田舎 (rural)」として位置づけられ、解体されたのだ——そう考えると、「地域」に注目する活動は、この危機に抵抗し、脱出口を見出すためのムーブメントとして位置づけることができる。

考えてみれば2007年に「財政再建団体」となった“夕張”は、あきらかに現在の日本の政治・経済的危機の「前触れ」だったといえる。振り返ってみれば、“夕張”には、20世紀の様々な出来事のエッセンスが詰まっている。だが、もはや現実の夕張には、それを指し示すものの多くは取り壊され、痕跡がわずかに残されているのみである。しかし、それが息づいていた往時の記憶をよみがえらせることは、決して不可能ではない。それは「映像」が残されており、それを見ることで、時間を飛び越え、その時代を生きた「気分」を想起することができる人々が、まだ生活しているからだ。

記憶こそ「再生」の手掛かりである。“夕張”の映像には、単なる「懐かしさ」以上の意味が詰まっているのだ。

2. 戦後映像のコントラスト

今回の『夕張アーカイブス』は、夕張の「戦後」映像をじっくり見てみようというコンセプトで企画された。特に昭和 30 年代を中心に、国家の繁栄の中に位置づけられるマクロな夕張の姿と、そこに生きる市民の視線との二つの眼差しのコントラストを浮かびかがらせてみたいと考えている——この対比の中に、夕張の現実を、日本という国の「現代史」の中に位置づける糸が見いだせるはずだからだ。初日の『炭都夕張』（昭和 28/1953 年）『石炭の街ゆうばり』（昭和 40/1965 年）と二日目の『大夕張ダム』（昭和 36 年/1961 年ころ）の映像が前者、初日の『市民が見た夕張風景』（昭和 36/1961 年）、二日目の『第一回黒ダイヤ祭り』（昭和 39 年/1964 年）『ふるさとを歩く 白い夕張』（昭和 54/1979 年）が後者にあたる。

炭鉱と観光という夕張の二つの産業基盤は、いずれも「国策」によって形づくられたものである。ゆえに描かれる夕張の映像は、「国策」と「市民生活」の二つの眼差しに引き裂かれている。この二つの視座の対立は、常に「主題」を語る言葉の違いとして表れる。例えば国にとっての「エネルギー」問題は、市民にとっては深刻な「環境」問題として表れる。同様に「産業」vs「労働」「都市計画」vs「生活設計」「医療福祉」vs「健康」といったように、同じような対象を目にしていっても、そもそもそれを語る言葉が、国と市民とは違ってきてしまう。映像も同様である。マクロな立ち位置から撮られた映像は、俯瞰、パンやティルト（カメラの移動）を用いて風景全体を収め、個々の人間の力では決して及ばないスケールやパワーを描くことに懸命になっている。一方、ミクロな市民生活の文脈で描かれた映像は、そのアングルの多くが人々の視線の高さにあり、ズームを多用する——誰がどのような機材で撮ったかを考えれば当然のことではあるが、この違いは重要だ。

後者の映像の多くには、家族の姿や人々の笑顔が特徴的なシーンとして映し出されている。つまり映される人々はカメラを意識し、カメラにむけて「語りかけて」いるのだ。この行為は何を意味しているのか。彼らは「誰」に向かって微笑んでいるのか。それはおそらく不特定多数の誰かにではなく、自分も含めた身近な誰か、あるいは未来の自分に、である（これは、記念写真を撮る／に写るモチベーションと共通している）。つまりその「語りかけ」は、何か特定の伝えるべき情報を伝達しようとするものではなく、しいて言えば「私はここにいるよ」という存在のメッセージ、あるいはその存在をつなぐ（絆を生み出す）行為なのである。それに対し、マクロな映像は、常に何かを「伝えよう」としている。人間は中心になく、その伝えようとする物語の配役として描かれる。時には坑道、選炭場、工場といった施設、機械や技術の方が主役を担う。

しかし映像の面白さは、仮にこの様な明確な立ち位置の違いがあったとしても、例えば

市民的な映像の中にマクロな視線、あるいは国策的映像の中にも市民的な眼差しが混ざることがあるということであり、またそれは見る側の解釈も開かれている——明らかに政策的な狙いをもった PR 映像であっても、市民生活的リアリティで観賞し、エンタテインメントとして解釈することもできる、ということにある。さらに言えば、映像制作者が意図的にそれを仕込むという場合もある。今回見る映像には、いずれもその交錯を確認することができる。例え最も「市民的」である『市民が見た夕張風景』『ふるさとを歩く 白い夕張』の中にさえも、撮影者がいつの間にかマクロな立ち位置から風景を見ているシーンがあることに気づくはずだ。

3. 「戦後」は終わったのか：高度成長～バブル～失われた 10 年、そして 100 年に一度の経済危機

私はこの「交錯」にこそ、映像の世紀である 20 世紀の、特に戦後社会の謎を解くカギがあるのではないかと考えている。戦前映像は、その希少性や、そこに撮影・編集技術の向上のプロセスを見ることができるという意味で、大きな価値があるが、いかんせんそれは一部の愛好家のものでしかなかった（だから駄目、というわけではない。映像の歴史の黎明が、こうしたコミユナルな文化とともにあったという事実自体は、振り返られるべき重要な研究テーマである）。それに対し戦後映像は、放送にしても、どんなに個人的なものであってもその普及が「マスの」に促されたという意味で、パブリックな価値をもっている。昭和 40 年代、「私にも写せます」というコマーシャル・メッセージとともにシングル 8 システムが流行したことを思えば、そのムーブメントの社会性を考えることができるだろう。

ところで「戦後」は、既にいくつかの時代に区分されるものとして理解されている。昭和 31/1956 年の経済白書の「もはや戦後ではない」の言葉を境に、時代は「戦後」から「高度成長期」に移り、1973 年の第 4 次中東戦争勃発を期にはじまったオイルショックを経て、1985 年のプラザ合意を契機に、規制緩和と内需拡大志向が強まり 80 年代後半から 92 年にむけてバブルは膨らむ。その後は、失われた 10 年、である。この時代区分は、こうしてみるとあくまで「経済」というマクロな定規が引いた線であることがわかる。果たして市民的眼差しには、この区分はどのように映っていたのだろうか。もしかすると、「戦後」も「高度成長」も「バブル」も、視線はおなじ対象を追いかけて続けていたのではないだろうか。

「夕張、食うばり、坂ばかり、どんと一発死ぬばかり」という戯れ歌は、一見、絶望や諦念を表しているように映るが、そのアイロニーは「それでも、ここにいる（いたほうが、まし）」という存在に対するポジティブな意志に支えられていたとみることができる。そ

のギリギリではあるがどこか安定した心理は、三池闘争における「去るも地獄、残るも地獄」という横断幕にも通じている。その底の底にある「どこかに救いがある」ことを信じる楽天性が、市民生活を支えていたということは言えそう。実は、「戦後」も「高度成長」も「バブル」も、この市民的楽天性を刺激し続けたことによって形づくられた現象ではなかっただろうか。

特に昭和30年代後半～40年代前半（1960～70年）の日本社会には、こうしたムードがあふれていたように思う。「国」は、確かに成長し、豊かになっているのかもしれないが、庶民生活は“まだら”。一方でベトナム戦争や、学生運動、公害といった不安が広がる一方で、オリンピックから万博へと「発展」のレールは敷かれ、イメージだけは「新しいもの」に引きつけられていく。産業振興策につき従って、人々は移動を余儀なくし、日本中に集合住宅が作られ、生活の根拠に対する意識が流動化していく…。人々の視線が、市民的眼差しと国策的眼差しの間をいったりきたりし、“とっちらかった”高揚感と一種の「クルマ酔い」のような感覚を繰り返すことによって疲労していく。そんな時代であった。

1970年のヒット曲に岸洋子の「希望」という歌がある——この「希望」こそが、この時代、人々を動かしたキーワードである。こんな歌詞である——「希望という名の、あなたを訪ねて、遠い国へと、また汽車に乗る」。どこから来るかわからない、かたちも定かではない「希望」。だけどそれがあることで、それを市民たちは自分たちなりに解釈することで、生きていき、マクロなムーブメントに参加することができる。ここから考えられることは…「国策」とは、まさにそれを与え、時に奪い、また別の「希望」を示すことで社会のダイナミズムをつくりだす装置だったのではないか、という仮説である。『第一回黒ダイヤ祭り』の高揚感には、その「希望」の姿が表れている。人々が住み重ねた歴史のない街が「祭」を創作することの意味——「定住」の証しである「祭」を作ることによって、存在の確信を得ようとする人々の想いが、笑顔の下から見えてはこないだろうか。

4. もうひとつの「希望」～夕張に「地域」は「再生」できるか

総選挙で惨敗した自民党は、そのマニフェストにおいて、最後までこの「希望」を人々に与えることにこだわり続けた。結果、ついにその戦後的「希望」に人々は背を向けた。その意味で、本当に「いま」は歴史の転換点にあるのだろう。しかし、人々は「希望」にすぎること、それ自体をやめたのだろうか。

生活の重苦しいリアリティを、与えられた「希望」にすり替えて生きていくのではなく、自ら「希望」を生み出すには、どうしたらいいのだろうか。「成長」イメージが与えてくれるパワーとかスケールに身を寄せるのではなく、個々の人々の「生きていく」リアリティから、なにか確かなものをつかむにはどうしたらいいのだろうか。

映像は、その手掛かりを与えてくれる。いかにここが石炭によってつくられた“人工都市”であったとしても、そこには濃密なコミュニティが生まれた。家族の笑顔があり、様々な文化や生活習慣が育った。マクロな文脈ではなく、ここに住み暮らす意味をどのように創り出していけるか。それは全て与えられた「希望」に還元されるのではなく、そこに「ひと」が暮らすことによってオリジナルに生み出されたものも少なくない。その存在を、記憶の中から一つひとつ確認していきたいものである。中央に帰属するだけの「地方」ではなく、自立した「地域」としての再生は、そうした作業の中から始まるように思う。「発展期だからできた、衰退したからできない」ではない。それは、そこに人がいる限り、可能なことだと信じる。

1. 水資源地域の活性化への効果

夕張市は高齢者率が高く、独居老人も多くいらっしゃいます。
こうした中で映画を通したコミュニティの形成方法等を探る事ができました。

また、夕張に残る古い映像の掘り起こしもでき、これを忘れつつある石炭の歴史を夕張の若い人たちに夕張歴史学伝える教材として使用し、新しい観光資源として、修学旅行や研修旅行誘致へと結びつけていきたい考えています。

2. 関係者、参加者の評価・感想

映像を通した街作りを行うとしては一定の評価はできるかと思います。
できれば 単年度ではなく長期的に 2 年、3 年かけて構築していきたいと思います。

夕張しかできないものもあり、継続して行っていきたい。

また地域の上映会も継続の声も多く継続できる方向性を作っていきたいと考えています。

3. 活動の実行体制

ゆうばり国際ファンタスティック映画祭との兼ね合いもあり、スタッフもダブって行動している方もあり、タイトであったと思います。
また事業発表も 2 月末終了と実績報告まで時間もなく作業としてはとても大変であった。しかし東海大学の学生や地元 NPO の協力へながら実施することができ、地元若手グループとの協働ができたことは大変良かったと思っております。

4. これらの結果を踏まえ、今後の水資源地域の長期的な安定・発展を図るための活性化方策

夕張は水源地としての地域性もあるが、旧産炭地として特徴が強く、昔の夕張を隠すことなく、新しい資源として活用していく事が必要と考えます。北海道としても 炭鉱の記憶を掘り起こそうと作業を行っております。

これからの観光は 地域独自のものがなければ、なかなか観光客、交流

人口を増やしていくことはできません。(富良野 美瑛のラベンダー、旭川の旭山動物園、ニセコのアウトドア 帯広の豚井・ばんえい競馬など)

夕張は、炭鉱の歴史という独自のものがあります。また夕張メロンというブランドもあります。市民活動として NPO 法人ゆうばりファンタによる国際映画祭の開催もあります。またシュューパロダム建築に伴う観光と活用も新しい観光資源として活用できます。そうしたものを、夕張から情報をどんどん発信し、夕張を知っていただくことが必要と考えています。高齢化率も高く、人口もどんどん減っていくなかで(15年後 6千人になるという見方もあります。)どのように 交流人口を増やし、地域コミュニティを形成していくか具体的な活動が必要と思います。

この事業を受けて

財政破綻後、人口の流出が止まらず、観光施設もどんどん閉鎖されていく中で、新しい取組み、情報を発信していかなければいけません。

夕張は、『炭鉱の町』『夕張メロン』『映画のある街夕張』と他の地域にはないキーワードがあります。また高速道路の開通や、夕張シュューパロダムの建設など明るい話題もたくさんあります。今年は、ダム建設を修学旅行生に見学させようとコースに入れているものもあります。

今回、映画と炭鉱とキーワードとして、この4つの事業を行いました。まずは、人口が減っている限界集落にもう一度地域のコミュニティをと懐かしの映画の上映を行いました。3会場行いましたが、おじいちゃんもおばあちゃんも、そして子ども達も笑顔で映画を観て、会話を楽しんでいたできました。

また『信さんー炭鉱町のセレナーデー』の上映会では、福岡の炭坑町の物語ではあったのですが、昔の夕張と見比べてみていた方が多かったようです。

夕張市の記録映像の収集及び編集では夏頃より、昔の映像の所在地は今どうなっているのだろうかという映像におさめ編集し、また夕張の貴重な映像を上映する事ができました。

最後にトークセッションを行い、今回みた映像や、今回編集した映像を参考に夕張が生き残るためのヒントを探りました。

夕張にはどこの街にもないものがあります。『炭鉱の町』『夕張メロン』『映画のある街夕張』そして『破綻の街』。このキーワードを観光資源として夕張の情報をどんどん発信していく必要があります。

今回沢山の方々に参加していただきました。映像を通してたくさんの笑顔に出会う事ができました。また夕張に残っている映像はとても価値があり財産であるという共通意識ができたと思います。あとはどういう形で発信していくかという課題はあります。まだまだ表に出て来ない編集されていない映像もたくさんあります。この事業をきっかけに継続的に活動していき、情報を発信していき 市民活動の範囲で継続的に活動していきたい考えています。映像をとおして市民が笑顔になれるように。